

## 中国建国25周年国慶節参加と中国各地を歴訪して

誌名	日本獣医師会雑誌 = Journal of the Japan Veterinary Medical Association
ISSN	04466454
著者	杉山, 文男
巻/号	27巻12号
掲載ページ	p. 763-766
発行年月	1974年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 中国建国 25 周年国慶節参加と中国各地を歴訪して (その1)

日本獣医師会副会長 杉山文男

私はこのたび、中日友好協会の招きをうけて、日中友好協会（正統）が派遣する「中華人民共和国成立 25 周年祝賀代表団」の一員として北京に赴き、国慶節祝賀行事に参加、2 週間余にわたり中国に滞在、その間各地を友好訪問、参観帰国したので、以下号を追って報告する次第である。

なお、代表団の名簿は次の通りである。（敬称略）

団長 黒田寿男（日中友好協会会長）

副団長 宮崎世民（日中友好協会理事長）

秘書長 檜崎富男（日中友好協会事務局長）

団員 有山兼孝（名古屋大学名誉教授）

// 中西虎吉（日中友好協会福岡県常任理事）

// 古谷荘一郎（日中友好協会山口県本部理事長）

// 鳥居良夫（日本柔道整復師会会長）

// 杉山文男（日本獣医師会副会長）

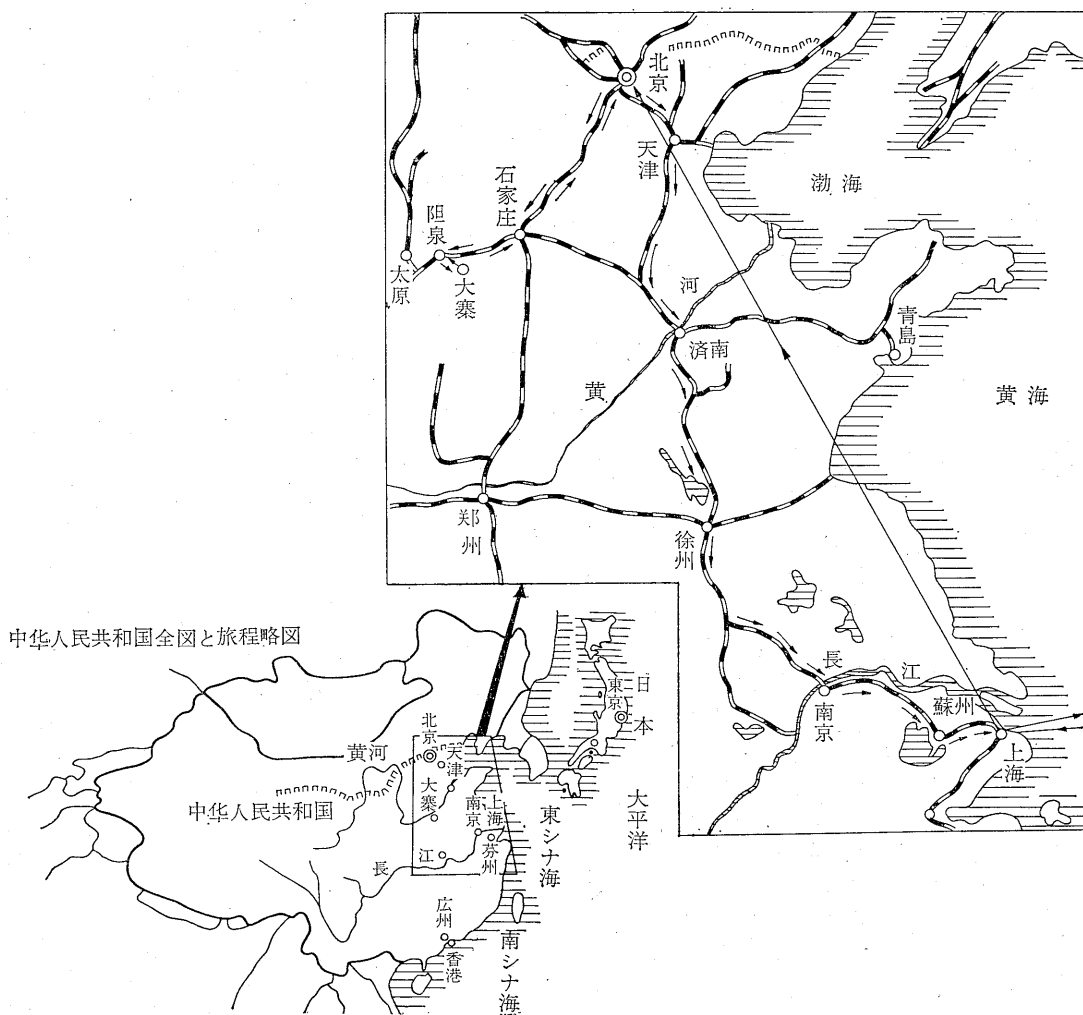
// 山本忠義（日本弁護士連合会副会長）

// 佐藤惟恭（日本労働組合総評議会副議長）

// 紀平梯子（日本婦人有権者同盟会長）

// 春日嘉一（日中友好協会常任理事）

このたびの代表団は、中国国慶節 25 周年、日中国交





中華人民共和国国慶節祝賀  
日中友好協会(正統)代表团

正常化2周年および、日中定期航空路開設という三つの記念すべき派遣団となったわけで、日本からは、われわれと一緒に日中文化交流協会も、中国人民対外友好協会の招きで代表団を派遣したが、二つの代表団は、9月29日中国機一番機の帰航便に搭乗、北京滞在中は、ほとんどその行動を共にした。参考までに日中文化交流協会の団員を紹介すると、次の通りである。(敬称略)

- 団長 中島健蔵(日中文化交流協会理事長)
- 副団長 宮川寅雄(同副理事長、和光大学教授)
- 秘書長 白土吾夫(同事務局長)
- 団員 島野武(仙台市長)
- 〃 井上靖(作家、日本芸術院会員)
- 〃 武蔵川喜偉(日本相撲協会相談役)
- 〃 有吉佐和子(作家)
- 〃 佐藤純子(日中文化交流協会常任理事)
- 〃 安田順恵(画家)

読者の中には、なぜ日本獣医師会から代表を派遣したか詳かでない方もおられると思うので、その間の消息を明らかにしておいた方がよいと思う。

1971年3月の日本獣医師会の定期総会において、日中獣医畜産技術交流の推進が決議されてから、早速、促進のための日中獣医畜産技術交流促進委員会が結成せられて今日におよんでいる。その間、宇都宮徳馬代議士(自民党)等を通じて、中日友好協会会長廖承志氏宛に日獣協会長より親書を再度にわたり託し要望してあったが、今まで何の反応もなかったところ、このたび突然、日中友好協会より参加要請を受けたものである。しかしながら、この実現のため、終始、陰ながら努力せられた徳島県獣医師会副会長の小島悦吉氏(日中友好協会常任理事)のことを忘れてはなるまい。

訪中の日程は、大体次の通りであった(略地図参照)。

9月29日 北京着。北京飯店新館泊。

9月30日 北京市西城区半導体工場および北京市大柵欄街地下防空壕の見学。夜は、周恩来首相の招待による中華人民共和国成立25周年の祝宴に参加。

10月1日 国慶節の園遊会に招かれ、頤和園(万寿山)に遊ぶ。夜は労働者体育場でおこなわれた記念花火会に参加。

10月2日 中日友好協会との会談。午後は北京市郊外の臥仏寺、香山公園見学。夜は天橋劇場において、バレエ「白毛女」を見物。

10月3日 鄧小平副総理と会談。午後は八達嶺、万里長城を見学。夜は郭沫若氏(中日友好協会名誉会長)と会談。さらに廖承志会長の歓迎招宴に出席。

10月4日 午前中、紅星人民公社見学。午後は第2回の中日友好協会との会談。

10月5日 北京市獣医病院の見学(馬の針麻酔)。午後は北京工芸美術工場の見学。

10月6日 故宮(紫金城)の見学。夜、中国農業のメッカ大寨に出発。

10月7日 大寨生産大隊見学。

10月8日 石評生産大隊の見学。夜、北京帰着。

10月9日 北京大学、北京動物園見学。夜南京に向けて出発。

10月10日 正午南京着。長江大橋、南京天文台の見学。夜は南京飯店泊、招宴(紅小兵の歌と踊りの歓迎)。

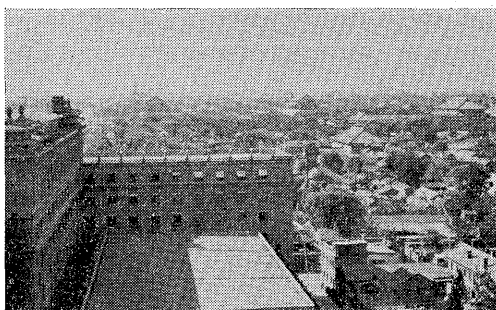
10月11日 中山陵参拝。蘇州へ、蘇州飯店泊。夜は江蘇対外友好協会会長の招宴に出席。

10月12日 虎丘、刺繡研究所、寒山寺、拙政園の見学。夜上海へ。錦江飯店泊。

10月13日 奉賢縣幹部学校見学。夜は上海交響楽団の歓迎演奏に出席。

10月14日 大場肉類連合加工工場見学。午後は鳳城新村の労働者団地見学。夜は上海革命委員会の歓送宴。

10月15日 魯迅故居見学。帰国。



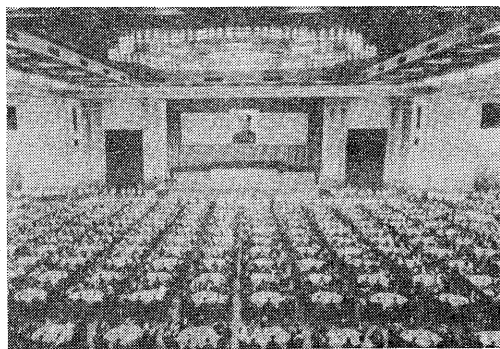
北京市内故宮方面を望む

北京と東京を空で結んだ中国民航922便ボーイング707が、東京から折り返えし離陸したのが、出発予定20分遅れの16時35分であった。空港には、中村会長ほか、多数の会員諸君が幟を押し立て、見送ってくれ、また、中国大使館からは、李連慶参事官、ほか大使館員も「平穩な空の旅を」と挨拶に見え、揃って記念撮影をし

た。途中、富士の壮麗な姿を眺めながらの快適な空の旅が続いた。ライフ・ジャケットの着用を実演して見せる国民服姿のスケジュールのしぐさは、ほかの飛行機と同じだが、機内のサービスで「どうぞ」という言葉は出たが、ほかは中国語と英語の二カ国語だけ。アナウンスも「機内の撮影とラジオの使用はお断り」と述べたほかは型通りで簡潔かつ実務的である。上海には18時15分（途中1時間遅らせた時差修正）小雨の煙る中を安着。気温は24度で蒸し暑い。空港建物正面の中華人民共和国万才—上海空港—世界人民大団結万才の朱いネオンの大文字が、まことに鮮明で、中国を訪れた感慨が始めて実感として胸に迫る。上海革命委員会要人多数の出迎えを受け、空港特別室に案内されて夕食会が催された。1時間の休憩予定が30分遅れ、19時45分上海を再び飛び立った。面白かったのは、私がしきりに出発時刻に遅れはしないかと時計を気にしているのを、革命委副主席が目ざとく見つけ、「われわれの食事が済むまでは、飛行機は出発させません。定刻より友好第一です。乾盃を続けましょう」といわれ、さすが中国風と感心した。機外に出たわれわれ二つの訪中代表团以外の、殆んど満席の旅客は、その間、一汁二菜の簡素な機内食で、静かにわれわれを待っていてくれ、まことに申し訳ない気持がした。

北京には、21時20分着、東京から北京までの実質飛行時間は3時間50分であった。直行便の時代が明けて、東京—北京はひとつ飛びとなった。空港には、夜遅いにもかかわらず、廖承志氏（中日友好協会会長）ほか多数の要人が出迎えていた。挨拶もそこそこに、10数台の红旗、上海（いずれも中国製の乗用車）を連れて、ノンストップで、宿泊先である北京飯店新館に向かった。

空港より北京市内までの約30分の間、ポプラと揚柳の並木が夜目にも美事であり、道巾40m、真直線に40kmとのことである。ロバに曳かせた荷車数台。また自転車の行列が続いているため、通訳に聞いたところ、これから職場の工場へ向かうところであり、工場の機械を休ませるのはもったいないから、どこでも3交代で24



人民大会堂の祝賀宴

時間働いており、従って、映画館も、食堂も、市場も勤労者のため24時間営業しているとのことであった。街並は、建国25周年祝賀一色に塗りつぶされ、至るところに飾られている真紅の慶祝提燈が目を射り、イルミネーションがまばゆい程である。北京飯店の新館は、旧館に接続して9月に完成されたばかりの中国一の大ホテルで、われわれは日本人として、ほとんど最初の客なはずである。私は10階38号室に泊ることになったが、部屋には明日の国宴のための次のような招待状が届いていた。

为庆祝中华人民共和国成立二十五周年  
订于一九七四年九月三十日（星期一）下午  
七时半在人民大会堂宴会厅举行招待会  
请参加

周 恩 来

#### 中国建国25周年の祝賀会

周恩来首相は30日夜、人民大会堂の宴会場で、中華人民共和国成立25周年を祝賀する盛大なレセプションを開催した。恐らく1,000台を超えると思われる自動車、バスの列が、陸続として大会堂周辺の広場を埋め尽くす。宿舎の北京飯店から、歩いても大してかからない会場へは、例のごとく1台に2人宛を乗せ、人また人、まさに人海の名にふさわしく、人の波が見守る中を19時20分に到着した。僅か9カ月で建築したといわれるこの人民大会堂は、その広さ、大理石などの材料の豊富さ、絨緞など調度品の見事さにおいて、まさに壮麗の表現につきる。立食パーティなら既に1万人の会合をした経験があるといわれるこの大宴会場は、全くの無柱で、世界の建築学界でも謎とされている由である。既に中国全土、世界各国から集まった4,500人の参会者で、さしもの大宴会場も立錫の余地がないほどである。わが国の小坂善太郎・赤城宗徳・古井喜実各氏など、おなじみの顔も見える。これは日航の日中一番機で招待された中国友好訪問団の一行である。私のテーブルは、右の方へ、有吉佐和子女史、謝氷心女史（中国で最も有名な女流作家）、井上靖氏、鳥居会長、島野仙台市長、呉印成氏（中国文化面の責任者）有山教授の順である。4,500人のざわめきが一瞬ピタリとやんだ。全員が総立ちとなり、すべてのひとみが正面左の入口に注がれた。高らかに奏される『団結、有誼行進曲』万雷の拍手の中を周総理を先頭に内外の要人がぞくぞく入場してメーンテーブルに着席した。「周総理だ 周総理だ！」というざわめきがあちこちでおこる。実は周総理が長い間の病気のため、この夜の出席が危ぶ

まれていたのだ。長く長くつづく拍手。董必武国家主席代理、王洪文党副主席、朱徳全国人民代表大会常務委員長、康生党副主席、葉剣英党副主席、宋慶齡国家副主席ら毛沢東主席を除く中国の最高指導層のほとんど全員が出席である。周首相の隣りにはカンボジアのシャヌーク殿下が着席した。やがて周総理のあいさつ。演壇に立った総理の顔はやや青白く、いつも写真で見るとよりはやせて見受けられる。しかし、その挨拶の口調は、一語一語に力がこもり、はじめは一段落ごとに、さいごは一句ごとに会場から拍手がわきおこった。最後に「中国各民族人民の団結のために、世界各国人民の大団結のために乾杯」と結んだ瞬間、期せずして会場を埋めつくした全員が総立ちとなり、しばし拍手が鳴りやまなかった。

この挨拶の内容は、中国語で印刷され、事前にテーブルの上に配布されていたので、われわれ漢字民族には殆んどその意味が汲み取れた。中国における現在の生々しい態様が、うかがい知れると思われるので、参考までにその全容を記してみると次の通りであった。

来賓の皆さん、友人の皆さん、同志の皆さん。

25年前、中国人民の偉大な指導者毛沢東主席は、全世界に向かって「中華人民共和国が誕生した。中国人民はここに立ち上がった」とおごそかに宣言した。

25年来全国の各民族人民は、毛主席を頂点とする中国共産党の指導のもとに、社会主義の道に沿って勝ち進んできた。とくにプロレタリア文化大革命を経て、劉小奇、林彪という二つのブルジョア司令部を粉砕し、帝国主義、社会帝国主義の封鎖、侵略および転覆を粉砕した。われわれの偉大な祖国の面目は一新し、われわれのプロレタリア独裁は、空前に強固となり、いまやわれわれの友人は、天下いたるところにいる。

この光輝に満ちた国慶節を祝うにあたり、私は偉大な指導者毛主席、中共中央、中国政府を代表して、全国の各民族人民に熱烈な祝賀の意を表明する。われわれは、引き続き批林批孔運動を立派にやり、プロレタリア独裁のもとでの継続革命を堅持し、団結一致、刻苦奮闘し毛主席の革命路線に沿って、雄々しく前進する。

われわれは全世界の人民および各国の友人がわれわれに与えてくださる支持と援助に対し心から感謝する。われわれは今までと同様、世界人民と一緒に、帝国主義に反対する斗争を徹底的におし進める。

中国各民族人民の団結のために、世界各国人民の大団結のために乾杯。

この日、国宴に招かれた4,500人の中には、批林批孔運動ですすんだ役割りをしている単位の代表や、農村に住みついた知識青年の代表、労農兵代表、労農兵出身の学生代表、紅衛兵代表、北京市民の代表らが沢山おり、また、世界各国の民族衣裳展のやうな盛装姿があふれ、まことに目を奪うばかりであった。

祝宴は21時まで、華やかにつづけられた。隣りの有吉女史が、周総理の健康をしきりに心配していた。

謝氷心女史が、しきりに気を配ってくれ、マオタイ酒を注ぎ、料理を盛り分けてくれた。この夜、マオタイ先生という、あまり有難くない異名を頂戴した私が、マオタイ酒の乾杯が、一番強かったからのようである。お笑いぐさまでに当夜のメニューを記すと次のようである。

菜		単		点		心	
咸味烤鸭	陈皮大虾	月		餅			
炸鸡球	糖醋鱼条	小		面		包	
麻辣牛百叶	卤鸡蛋						
炆扁豆	酸甜白菜			水		果	
椒盐花生	油焖笋	哈		蜜		瓜	

宴がはて、小雨もあがって十五夜の月が、イルミネーションで飾られた天安門を、ひときわ美事に浮き立たせていた。一口に25年といっても、この四半世紀、中国は社会主義国家建設という大目標に向かい、たびたび内外から軌道修正をしいられてきた。1971年の国連参加、米中接近などめざましい国際舞台への復帰まで、中国はいわゆる竹のカーテンに隔てられ孤立した社会であった。

しかし、それが自力更生という社会主義国家建設の一つの有利な条件を提供したのも否定できない。政治的に曲折を経ながらも中国の社会主義化はいま着実に進展している。一衣帯水の間に在るわが国としては、体制の違いこそあれ、人類始まって以来の壮大なる社会主義革命の実験が行なわれているのを、冷静に認識せねばならないと思う。

(つづく)

日獣図書案内

新刊

技術の手引き13 農林省畜産局衛生課 共同監修  
農林省家畜衛生試験場

牛の放牧衛生

執筆：農林省家畜衛生試験場 研究部長 米村寿男氏、同九州支場長 石原忠雄氏、ほか18専門研究者の共同執筆

定価 2,600円 送料 140円

A5版 325頁 図表多数挿入

発行 日本獣医師会